

中学生のダンスに対するイメージ

— 男女差の検討 —

酒向 治子 ・ 永田 麻里子* ・ 出原 智波**
宮本 乙女*** ・ 猪崎 弥生*

Keywords : ダンス, ジェンダー・イメージ, ジェンダー・バイアス

1. はじめに

本研究は猪崎 (2012a, 2013)・酒向 (2013) に引き続き、ダンスに対するイメージ、特にその男女差を検討しようとするものである。中学校体育において、2008年度に学習指導要領が改訂され、2009年4月より中学校体育1・2年においてダンスが男女必修化となり、2012年度より完全施行されるに至っている。こうした現在、男子生徒にダンスをどのように教えるか、教員、特にダンス授業を行ったことのない男性教員の研修¹⁾をどのようにしていくのか、などが喫緊の課題となっている。

筆者らは、男女共習のダンス授業のモデルとその理論を構築する作業に取り組んでいる²⁾。これまで中学校ダンス授業の参与観察³⁾や日本舞踊家を招いたパイロット授業⁴⁾、大学生や中学生を対象とした質問紙調査を行ってきた。具体的には、いくつかの中学校で開催された公開授業や通常の授業を見学し、授業担当者にインタビューすることによって、ダンス授業の内容と方法を検討した。また、日本舞踊における「男らしさ」「女らしさ」の身体表現の学習を通して身体性と表現性⁵⁾について考えさせるダンス授業を検討した。さらに、質問紙調査をもとに、ダンス及びダンス授業に対する意識と態度、特にジェンダー・イメージやジェンダー・バイアスについて検討した。

ここで、中学校における男女共習ダンス授業と体

育教員を対象とした研修の内容と方法を検討するにあたって、ダンス及びダンス授業に対する中学生の意識と態度を調べることの意義について説明する。ドゥブラーが述べているように、ダンス授業は情操教育に他ならず、その学習目標はダンスを通して子どもが自らのパーソナリティを成長させるすべを獲得することにある (H'Doubler, 1998, 2nd. ed. 猪崎, 2012, pp35-36)。従って、ダンスに対する意識と態度は、ダンス授業の前提であると同時に目的である。そもそも生徒がダンスに対してイメージや態度をどのように持っているかがわからなければ、ダンス授業の内容や方法は定まらない。また、言うまでもなく、ダンス授業の目的は、ダンスを好きにさせ、ダンスに対する見方が偏っていれば是正し、ダンスの学び方や親しみ方を習得させることにある。筆者らが、ダンス授業の開発と同時にダンスに対するイメージを測定する尺度を検討していることは、こうした理由による。

ダンス・イメージにおけるジェンダー・バイアス⁶⁾や男女差を検討する作業の手始めに、舞踊運動評価尺度 (2006) を参考に尺度を作成し、大学生を対象として調査を実施し、ジェンダー・イメージや男女差を検討した (猪崎, 2012)。現在、いくつかの中学校において中学生を対象にその尺度を用いて調査を進めている。すでに実施したA中学校、B中学校の2つのデータを分析し比較したところ、興味深い結果が得られたので、ここに報告する。

岡山大学大学院教育学研究科 生活・健康スポーツ学系 保健体育講座 700-8530 岡山市北区津島中3-1-1

*お茶の水女子大学 〒112-8610 東京都文京区大塚2-1-1

**元岡山市立操山中学校教諭

***日本女子体育大学 〒157-8565 東京都世田谷区北烏山8-19-1

Sex Difference in Dance Image of Junior High School Students

Haruko SAKO, Mariko NAGATA*, Chinami IDEHARA**, Otome MIYAMOTO***, and Yayoi IZAKI*

Physical Education, Graduate School of Education, Okayama University, 3-1-1 Tsushima-naka, Kita-ku, Okayama city 700-8530

* Ochanomizu University, 2-1-2 Otsuka Bunkyo-ku, Tokyo 112-8610

** Misaoyama Junior ex-High School Teacher

*** Japan Women's College of Physical Education, 8-19-1 Kitakarasuyama Setagaya-ku, Tokyo 157-8565

2. 方法

実施時期 2011年10月から12月；初回ダンス授業前
 回答者 A中学校に在籍する1年生122名とB中学校に在籍する1年生123名の計245名。男女の内訳を表1に示す。

表1 回答者の内訳

	男子	女子
A中学校	41 (34%)	81 (66%)
B中学校	70 (57%)	53 (43%)
	111 (45%)	134 (55%)

質問項目 (A中学校)性別を聞く項目、ダンス・イメージをSD法で5段階評定させる15項目
 (B中学校)性別を聞く項目、ダンス・イメージをSD法で5段階評定させる15項目、小学校のダンス経験に関する3項目、ダンスへの態度に関する3項目、ダンスに対するジェンダー・イメージを聞く項目の合計23項目。今回の分析では、性別を聞く項目とダンス・イメージの項目のみ用いる。

手続き 初回ダンス授業前に、担当教員が質問紙を被験者に配布し、回答を求めた。研究の趣旨を説明した上で回答を求めた。調査票への記名は求めている。また、調査票の冒頭、回答結果は研究に利用するのみで、他の目的に使用しないこと、回答結果はすべて統計的に処理しプライバシーが漏れることはないことを明記した。

3. 結果・考察

3-1. 15評定項目の評定平均値

ダンスの動きに対する「男らしさ」「女らしさ」を調べるために、猪崎(2006)の舞踊運動評価尺度をもとに作成した15項目7)について、「全く女らしい」1点、「やや女らしい」2点、「どちらでもない」3点、「やや男らしい」4点、「全く男らしい」5点として、男女別に評定平均値と準偏差を算出し、男女差についてt検定を行った。表2にそれぞれの中学校ごとの集計結果と全体の集計結果を示す。

表2に示すように、A中学校は15項目中5つの項目に有意な男女差が認められた。すなわち、女子

の方が男子より「軽い」「曲線的」を女らしいと捉え、「強い」はより男らしいと捉えている。一方、B中学校では7つの項目に有意な男女差が認められ、女子は男子より「バランスのとれた」「軽い」「規則正しい」を女らしいと捉え、男子は女子よりも「大きい」を男らしいと捉えている。

このように、A中学校とB中学校を比較すると、ともに有意な男女差が見られた項目は、「軽い」の1項目だけであり、その項目における男女の評定平均値の関係は同じである。

3-2. 主成分分析

主成分分析を行った結果を表3に示す。

第1主成分は、「単調な」「緊張」「バランスのとれた」「リズムカルな」「規則正しい」「軽い」「大きい」「直線的」の評定項目に代表される。第2主成分は、「強い」と「曲線的」(負の付加量)の評定項目に代表される。第3主成分は「高い」と「低い」(負の付加量)、第4主成分は「不規則な」、第5主成分は「アンバランスな」と「スピードが遅い」に代表される。

これより、「男らしさ」「女らしさ」の認知構造は、第1主成分から第3主成分までである程度説明できると言えるだろう。第1主成分から第3主成分を命名すると、第1主成分は動きにおける単純性や複雑性を意味する「評価性」、第2主成分は「力性」、第3主成分は「空間性」と解釈できる。

3-3. 因子得点を用いた要因分析

第1主成分から第5主成分の各評定値を算出し、男女間および学校間における得点差を調べるために2要因分散分析を行った。男女別、学校別の得点と主効果・交互作用の有無について表4に示す。

以下、有意な主効果や交互作用が認められた成分について言及する。

3-3-1. 男女差

男女別における主効果は、第1主成分にのみ認められた(表5)。A中学校、B中学校ともに、女子よりも男子の方が有意に高い得点を示した。

3-3-2. 学校差

学校間における主効果は、第5主成分を除く全ての主成分に認められた。第1主成分、第2主成分($F=7.20, p<.01$)、第3主成分($F=6.35, p<.05$)、第4主成分($F=8.79, p<.01$)のいずれも、A中学校よりB中学校の方が有意に高い得点を示した。

表2 15評定項目の評定平均値とSDおよびt検定の結果

	A中学校					B中学校					全体				
	男子(n=41)		女子(n=81)		t値	男子(n=70)		女子(n=53)		t値	男子(n=111)		女子(n=134)		t値
	平均	SD	平均	SD		平均	SD	平均	SD		平均	SD	平均	SD	
大きい	3.20	0.81	3.37	0.64	1.30	3.70	0.80	3.11	0.58	4.71 ***	3.51	0.84	3.27	0.63	2.54 **
バランスのとれた	2.41	0.77	2.33	0.59	0.59	3.06	0.83	2.26	0.74	5.59 ***	2.82	0.87	2.31	0.65	5.30 ***
軽い	2.44	0.98	2.01	0.72	2.48 **	2.64	1.05	2.11	0.67	3.40 **	2.57	1.02	2.05	0.70	4.51 ***
単調な	3.00	0.87	3.02	0.69	0.17	3.29	0.97	2.83	0.64	3.14 **	3.18	0.94	2.95	0.68	2.19 *
高い	2.54	1.05	2.58	1.02	0.22	2.97	1.06	2.66	0.62	1.90	2.81	1.07	2.61	0.88	1.59
強い	3.56	1.10	3.95	0.91	2.09 *	3.99	0.96	3.72	0.93	1.56	3.83	1.03	3.86	0.92	0.23
リズムカルな	2.39	1.00	2.58	0.67	1.10	2.79	1.10	2.66	0.76	0.71	2.64	1.08	2.61	0.70	0.23
アンバランスな	3.12	1.00	3.25	0.56	0.74	3.26	0.94	3.15	0.79	0.66	3.21	0.96	3.21	0.66	0.02
規則正しい	2.66	0.94	2.85	0.65	1.18	2.91	1.03	2.51	0.64	2.51 *	2.82	1.00	2.72	0.67	0.93
低い	2.98	0.91	3.36	0.84	2.31 *	3.37	0.92	3.21	0.86	1.00	3.23	0.93	3.30	0.85	0.64
スピードが遅い	3.17	0.92	2.84	0.80	2.06 *	3.23	1.04	3.08	0.78	0.90	3.21	0.99	2.93	0.80	2.35 *
直線的	3.12	0.98	3.20	0.68	0.50	3.37	0.90	3.08	0.68	2.08 *	3.28	0.94	3.15	0.68	1.22
緊張	2.80	0.78	2.88	0.58	0.57	3.23	0.98	2.85	0.74	2.44 *	3.07	0.93	2.87	0.65	2.04 *
不規則な	3.22	0.69	3.15	0.67	0.55	3.59	0.84	3.36	0.71	1.62	3.45	0.81	3.23	0.69	2.26 *
曲線的	2.61	0.95	2.28	0.76	2.05 *	2.93	1.09	2.68	0.80	1.40	2.81	1.05	2.44	0.80	3.14 **

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

表3 主成分分析の結果

	成分1	成分2	成分3	成分4	成分5	h ²
単調な	0.61	0.01	-0.01	-0.06	-0.49	0.62
緊張	0.60	0.11	-0.07	0.00	-0.09	0.38
バランスのとれた	0.58	-0.40	0.06	0.01	-0.08	0.51
リズムカルな	0.57	-0.26	-0.11	-0.14	0.04	0.42
規則正しい	0.55	-0.12	-0.30	-0.48	0.00	0.63
軽い	0.53	-0.52	-0.15	0.31	-0.15	0.69
大きい	0.52	0.48	0.36	-0.22	0.05	0.67
直線的	0.47	0.44	-0.18	0.17	-0.36	0.60
強い	0.25	0.72	0.32	-0.15	0.03	0.70
曲線的	0.45	-0.45	0.26	0.27	0.27	0.61
高い	0.48	-0.21	0.55	-0.27	0.10	0.66
低い	0.28	0.44	-0.51	0.19	-0.01	0.57
不規則な	0.20	0.22	0.36	0.75	-0.07	0.79
アンバランスな	0.41	0.28	-0.09	0.04	0.53	0.54
スピードが遅い	0.41	0.08	-0.33	0.17	0.53	0.59
寄与率(%)	22.72	13.58	8.41	8.11	7.06	
累積寄与率(%)	22.72	36.30	44.72	52.82	59.88	

表4 評定平均値とSDおよび主効果・交互作用の有無

	A中学校				B中学校				主効果	交互作用 (性別×学校)
	男子(n=41)		女子(n=81)		男子(n=70)		女子(n=53)			
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD		
第1主成分	2.75	0.47	2.78	0.28	3.12	0.63	2.68	0.32	性別、学校	あり
第2主成分	3.09	0.79	3.12	0.51	3.46	0.72	3.20	0.56	学校	—
第3主成分	2.76	0.61	2.97	0.41	3.17	0.75	2.93	0.46	学校	あり
第4主成分	3.22	0.69	3.15	0.67	3.59	0.84	3.36	0.71	学校	—
第5主成分	3.15	0.72	3.04	0.54	3.24	0.82	3.11	0.63	—	—

表5 第1主成分における2要因分散分析の結果

要因	分散分析				比較検定	
	df	F	P	編η ²		
性別	1	12.56	0.00 **	0.05	男子>女子	
学校	1	5.08	0.03 *	0.02	B中学校>A中学校	
性別×学校	1	16.12	0.00 **	0.06	男子:B中学校>A中学校	
誤差	241					

*p<.05, **p<.001

3-3-3. 男女と学校の交互作用

性別と学校間の交互作用は、第1主成分と第3主成分に認められた(図1, 図2)。第1主成分においては、男子はA中学校よりB中学校の方が有意に高い得点を示した($F=16.12, p<.001$)。第3主成分においては、B中学校では、女子より男子の方が有意に高い得点を示した($F=8.95, p<.01$)。

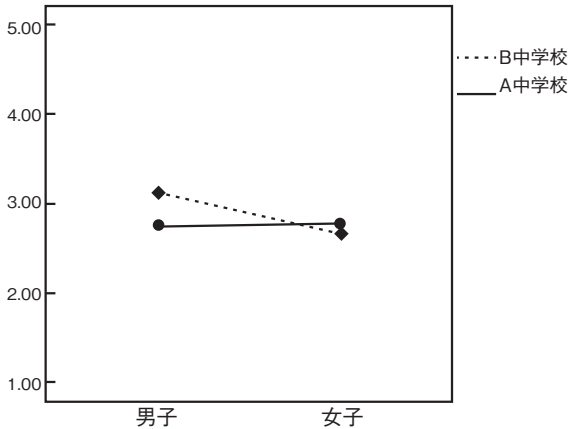


図1 第1主成分の得点

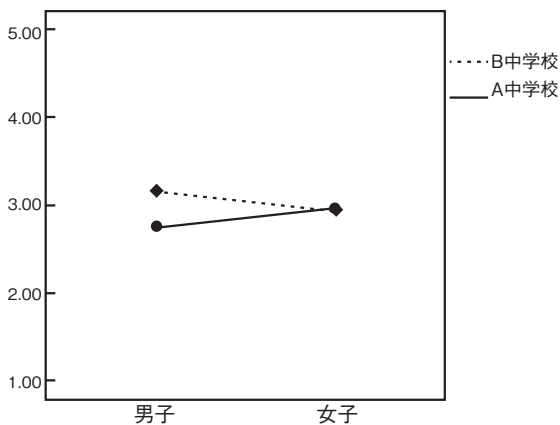


図2 第3主成分の得点

4. 討議

それぞれの中学校の15項目について男女の評定平均値を比較したところ、それぞれ5項目以上に有意な男女差が認められたが、ともに有意差が見られる項目は1項目だけである。これは、ダンス・イメージの男女差の質が中学校によりかなり変動しうることを示唆していると考ええる。

今回の結果と、中学生と大学生のダンス・イメージ(猪崎, 2012)を比較してみる。有意な男女差の項目を比較すると、A中学校は5項目、B中学校7項目であったのに対し、大学生は3項目である。このことは、中学生と大学生ではダンスの動きの「男らしさ」「女らしさ」に対して異なった捉え方をし

ていることを示唆していると考ええる。

主成分分析の結果、15項目の尺度を用いて得られたデータから、5つの主成分が抽出された。それぞれの主成分について因子得点を求め分散分析して、男女、学校、およびそれらの交互作用を吟味した結果、第1主成分に男女差が認められた。また、4つの主成分において学校差が認められた。さらに、2つの主成分に男女と学校の交互作用が認められ、A中学校には男女差が認められなかったのに対し、B中学校には男女差が認められた。

交互作用を示す図1, 図2からわかるように、本研究で見いだされた学校差は、それぞれの学校における男女差の有無である。すなわち、評定平均値をみると、A中学校では男女とも第1主成分と第3主成分において3以下の3に近い値であるのに対し、B中学校の女子はA中学校の女子の値と有意差はあるものの、同様に3以下で3に近い。一方、B中学校の男子はどちらの成分も3以上で3より大きい値である。従って、A中学校で見られなかった男女差がB中学校で見られた理由は、B中学校の男子が他の3つの群と異なる値を取っているからと言える。

B中学校の男子が他の群と異なる値を示したことはどういう要因が関わっているのだろうか。例えば、小学校時代のダンス経験やメディアを通じた影響などが考えられるが、いろいろな中学校のデータをもとに検討を進める必要がある。このような学校差と関わりのある要因については、さらに調査・検討していく。

〔付記〕

本研究は、科研費(22310160)および科研費(24700623)の助成を受けたものである。

注

- 1) 体育教員向けのダンス研修会等の講習会は、男性教員だけを対象にしているものではないが、最近の講習会は(社)日本女子体育連盟主催のJAPEW SUMMER SEMINAR 2012(8.18-20)や東京都女子体育連盟主催の第25回ダンス講習会(10.21)などがある。
- 2) 平成22年度から平成25年度科研費基盤(B)「多様な身体を目指すジェンダーフリーなダンス教育法の開発と構築」のプロジェクトに取り組んでいる。
- 3) お茶の水女子大学附属中学校、岡山大学附属中学校、琉球大学附属中学校、岡山市立操山中学校におけるダンス授業の参与観察および公開授業研究会参加などである。

- 4) 平成21年度科研費「ひらめきときめきサイエンス」における中学生を対象とした日本舞踊の動きを用いたダンス授業を行った。
- 5) 猪崎弥生・水村真由美(2009)を参照されたい。
- 6) 本研究においては、ダンスが「女子のもの」と考える傾向を「ジェンダー・バイアス」と捉える。
- 7) 尺度構成の検討については、猪崎(2012a)の中で詳述した。

参考文献

- H'Doubler, Margaret N. (1998, 2nd.ed.) Dance A Creative Art Experience, The University of Wisconsin Foundation.
- 猪崎弥生(2006) 舞踊教育における「見る」に関する実証的研究. 神戸大学人間総合科学研究科博士論文.
- 猪崎弥生・水村真由美(2009) 日本舞踊における女らしさの表現—印象評価に基づいて. 表現文化研究8(2): 77-83.
- 猪崎弥生・水村真由美・米谷淳(2010) 日本舞踊家のジェンダー表現—ジェンダーフリーなダンス教育プログラムを考える. 表現文化研究9(2): 119-128.
- 猪崎弥生・酒向治子・水村真由美(2011) 中学生のダンスにおけるジェンダー・イメージその1. 性差の検討—. 日本体育学会第62回大会予稿集: 102.
- 猪崎弥生・永田麻里子・酒向治子(2012a) 大学生はダンスにおける「男らしさ」「女らしさ」をどのように捉えているか—質問紙調査に基づく検討—. スポーツとジェンダー研究 10:16-22.
- 猪崎弥生(2012b) 開かれた身体を求めて—舞踊学へのプレリュード—. 一二三書房.
- 酒向治子・永田麻里子・田中俊之・米谷淳(2013) 中学校のダンス・イメージ, ダンスに対する態度, ダンス授業の評価: 質問紙調査を基に. お茶の水女子大学人文科学研究9:15-24.
- 酒向治子・永田麻里子・出原智波・角南順子・猪崎弥生(2013) 教員と中学生のダンスに対するジェンダー・バイアス. 岡山大学大学院教育学研究科研究集録 152:45-49.
- 宮本乙女(2002a) 男女でダンスを学習すること—ダンスとジェンダー—. 女子体育44(2): 34-37.
- 宮本乙女(2002b) ダンス学習とジェンダー 報告2—ダンス学習による学習者と指導者の意識の変容—. お茶の水女子大学附属中学校紀要32: 103-118.
- 佐藤吉高(2012) 創作学習モデルを基につくるダンス授業の実践と授業評価. お茶の水女子大学附属中学校紀要41: 37-49.
- 輿儀幸朝(2010) 保健体育科学習指導案ダンス(集団パフォーマンス). 平成22年度第23回教育研究発表会学習指導案集. 琉球大学附属中学校: 73-78.

